

---

# 無月むずるのあくまでも素晴らしい恋愛遍歴

シラカベヒロ氏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無月むずるのあくまでも素晴らしき恋愛遍歴

### 【Nコード】

N1916Y

### 【作者名】

シラカベヒロ氏

### 【あらすじ】

あくまでも、素晴らしき、恋愛遍歴の話。

(前書き)

第九回BOXAIR新人賞で特になにもならず、落選したものです。誰の目にも触れさせないまま完全に抹殺しようと思ったんです。が一回弔います。

以下、BOXAIR8号に掲載されていた本作の講評。

『タイトルや文体など、細部に非常に気を配った書き方がなされており、かなりよくできている。また妹がかわいいなど直接的な魅力にも富んでいる。六話などはぜひ読みたい。他方で、あまりにもフアウスト的な文体芸がきつところや、『神のみぞ知るセカイ』の既視感の強さなどに問題を感じた。』

仰々崎不美の不幸せで幸せな五月（前編）

『人の不幸は蜜の味』

あまりにもよく言われる言葉で。  
あまりにもモラルのない言葉で。  
あまりにも正直で率直な言葉で。

そして、僕の彼女の座右の銘だ。

\* \* \*

五月。

大学入学から一ヶ月。

泣く子も黙るゴールデンウィーク明け。

僕は同級生の仰々崎不美（仰々崎不美）と付き合うこととなった。

その日。

あ、その日ってのは付き合い始めた日ってことだけど      その日。

夜中四時すぎ、大学そばのコインパーキング。

「イエス・キリストの名においてー、あたしの唾を受けるおー」

赤ブチ四角メガネをずり上げずり上げ、手に持った一冊の本を高らかに掲げながら、余野余莉（あまりのあまり）が楽しげに叫ぶ。そして、僕の目の前に立つ背広姿の男性の後頭部にぺっぺっぺと唾を吐き始める。

背広男（三十代前半・営業職だと勝手に予想）は、暗い表情で、ひたすら無言で、そして焦点の合わない目で、僕を見つめている。僕は結構な至近距離で彼と向かい合いながら、ぼんやり眠気と闘っ

ている（負け戦）。

男性の背後で親の仇ばりに唾を吐きまくり手に持つ聖書（ホテルで部屋の机の抽斗とかに入ってる感じの非常にベーシックなやつ）で後頭部をぺちんぺちんと殴りまくりながら余莉が言う。

「うし、そろそろ出るよーむずる。口開けといて」

僕は言われたとおり、気乗りしないけど、大きく口を開く。  
と。

ぱかつ、と大きく男が口を開けた。

黒いもやもやした煙のような何か（何かって言いつつそれがなんなのかは一応知ってるけど）が、ひゅつと男の口から勢いよく飛び出す。そして、すばんと僕の口にIN。

ごくろ飲み込む。無味無臭。

瞬間、男性がボタンとドミノ牌ライクに真後ろにぶっ倒れる。

すかさずそれを両手で支えながら、余莉が満足げに、

「よーし完了おーお疲れちゃん！ 帰っていいよありがと、むずる」

「……ん」ふはあ、とあくびをかましつつ、僕はくるりと回れ右。

「そんじゃまた明日ってか今日大学でー、車に気いつけてねーへっへへー、おつやすみー」

背後から余莉が、なんだかやたら楽しげな調子で声をあげる。それに対して特にリアクションせず、僕は眠気でふらふらしながらパーキングを出て、大学横の薄暗い歩道を下向きながらとぼとぼ歩き、よく行くローソンの前をゆっくり通過、早朝名物・大型トラック集団にびゅんびゅん追い越されながら歩いて歩いて、真つ暗なガード下をふらふらつと通り抜け、家まであと五分地点の交差点、信号をろくに確認しないまま横断歩道に進出、と、背中に走る重く大きな衝撃。鈍い、嫌な音。そして

僕は、飛んだ。

わあ、アイキャンフライ。

夜空に瞬く星々が、ほんの少しだけ僕に近づく。

ああ、もう数ヶ月後に飛んでれば夏の星座にぶら下がって上から花火を見下ろせてたのになー、なんて馬鹿なこと考えながらちよっ

と笑ったり。

二秒後。

かったいアスファルトに背中から垂直落下をキめておもつくそ叩きつけられることで僕の短い空中散歩は終わる。こうして僕は生まれて始めて背骨の悲鳴を聞いた。そして耳に響くは、遠く前方を走り抜けていくトラックの爆音。

そう。つまり、僕は轢き逃げされたわけだ。

諸兄、これは五月病の恐ろしい症例の一つだと思って欲しい。

ゴールデンウィーク明けのぼんやりした頭、ゴールデンウィーク明けのぐったりした体、ゴールデンウィーク明けのしっとりした心。その三つをコンプった状態で夜明け前に出歩くと人は轢き逃げされる。そんな新たな法則を発見し世に知らしめたというこの偉大な功績を称え僕こと無月むずるにはベスト交通安ゼニストとして記念のトロフィーと図書カード二千円分と全国各地のローソンで使用できるクオカード三千円分そしてテレホンカード一枚とドナーカード一枚と病院とかで使うあのテレビカード一枚とうーんやたらカードばかりくれるなーベスト交通安ゼニストなんか結構ケチというか現物主義的というかとにかくすっごいおなか痛いそして頭ぼんやりしてきた父さん母さんおじいちゃんおばあちゃんそして妹みんなみんな今日まで僕のことを見守ってくれてありがとう。 < f ? n >

そして僕は今から冥府へ「ねっ」  
「……………へ？」

路上に大の字になってぶっ倒れたまま、人生・走馬灯編の上映を終えてこれから新章・冥府冒険編のクランクインが始まるうとしていた僕の意識が、ぐいっと現実へ引き戻された。

霞みに霞む僕の目に映ったのは、白み始めた夜空をバックにすつと立つ、背の高い女の子。喪服ライクな黒いふわふわのワンピースを着て、腰まで届くいや腰どころじゃなくてよくよく見れば完全にかかとまで届いてる長い長い長すぎる黒髪を夜風になびかせたまるで天使のようないや天使で黒髪って変かーだって天使って普通金髪

くるくるクセつ毛っていうステレオタイプなイメージあるよねということは今僕を見下ろしているこの子は天使じゃないからそれなら悪魔？ だよなーだって世の中には大きく分けて二種類の人間がいますそれは天使か悪魔ですってそれどっちも人間じゃないじゃーんあーおなか割れそうに痛い！ ｛f?n｝ そして僕は今から冥「ねえってば」

「うあ、は……はい」

またクランクインしかけてた。危な。なんとか返事をしながら、ぼろぼろな意識を必死に保つ僕。女の子は、そんな僕をじっと見つめながら、

「無月むずる君、だよね君。私、仰々崎です。近代文学論の講義、一緒だよね確か。ううん、そんなことより　　ね、今、不幸？」  
「……え？」

不幸？ そりゃ轢き逃げされて意識が何度も冥府に行きかけて更に目の前の女の子が助けてくれるわけでもなくただ好奇心に満ちた表情で質問してくるっていうこの状況は確実に幸せではない！不幸なので、こくつと小さく頷、いたら頭が割れそうぐらいががんばった（割れてるかも知れない実際）。

仰々崎と名乗る女子は、ゆっくりりしゃがみ込み、じっくり僕を覗き込み、にっこり柔らかかに笑って、

「じゃあ私、君のことが好き。付き合おう？」

長い髪を揺らし、ゆるつと小さく首を傾げた。

静寂。

数秒の静寂。

生ぬるい夜風。

間。

僕は。

僕は、もうなんというか全然意味がわからなくて、にわか信じられなくて、本当にわけがわからなくてでもとんでもなく嬉しくて今すぐにでも飛び上がりそうまで全部が全部夢みたいで。

そんな様々な気持ちがちや混ぜになった結果、

「救急車呼んで」

ただ、そう懇願した。

\* \* \*

「……そういう感じで、君に呼び出されたおかげで、車に轢かれて仰々崎に惹かれて、結果、人生初の彼女ができて、ついでに言うところ打ち所良かったから傷も浅くてあっさり退院できて、ゆえにお礼言います、ありがと余莉」

昼。学食の隅っこの席。

僕は食後の豆乳（嫌いなんだけど売店にこれしか飲み物売ってなくてとつてもしぶしぶ）にストローを刺しながら、向かいに座る余野余莉に喋りかける。

彼女は僕に目もくれず、若干斜めにずれたメガネをずり上げもせず、がむしゃらにカレー（「がむしゃらに、カレー」じゃなくて「ガムシヤラニカレー」っていうメニユー名。がむしゃらに大盛り）をスプーンで口中に押し込んでいる。ぱくむしゃぱくぱく。そして顔を上げ僕に向かっておもむろに一言。

「あたし大学やめるわ近々」

文脈の繋がりとという概念を完全に過去にしたその彼女の唐突な宣言に、「ぎい」という辞書に載ってない全く新しい驚き方をしてしまふ僕。余莉はそれに対し特にコメントもせず、また黙々とカレー崩しに没頭し始める（ガムシヤラニカレーの大盛りつぶりはほんとはがむしゃらで、どれほどの量かっていうと今皆さんが想像してる量の軽く五倍ほどだと思って頂いて構わない、ゆえに食べてるっていうかもはや山崩してる感じにしか見えない）。

やめる？ 大学を？ まだ五月なのに？ 一ヶ月で？ なんで？

次々に疑問は湧くもののなんだかそれを口にする事ができず、とりあえず僕は豆乳を口にした。うーん、まずい。すぐストローか

ら口を離す。と、余莉が無言で豆乳パックをひったくり勝手にちゅうちゅうやり出す。そしてすぐ、

「うえーまっずうーそしてカレーとこの上なく合わねえー」

べーっと舌を出しながら顔をしかめて笑う。

余野余莉。

レンズに指紋がべたべた付いてる赤ブチ四角メガネ。

胸に巨大な黒い十字架の刺繍が入った目が痛くなるような蛍光イエローのぶかぶかパーカー。

使い込まれてよれよれになった味も素っ気もない白Tシャツ。

ファッションでなくガチダメージでそこかしこビリビリに破れたダメージジーンズ。

そしてショート以上セミロング未満という中途半端な長さのボサボサ狼ヘアー。

改めて見て思う。いい意味でも悪い意味でも余莉は高校のときから変わらない。無頓着というか適当というか雑というか、いやこんなこと言うとか様だつてなっちゃうけど余莉こんなだからいつまでたっても彼氏できないんじゃないかなあとぼんやり思う。顔もスタイルも別になんら、なんらというかわむしろ全然並以上なのに、彼女と出会ってこの数年間、彼女の身辺に浮いた話は一つもなくむしろ僕のほうが先に恋人ができてしまって、なんだかこれってウサギとかメ的だなーという的を射てるんだか射てないんだかな感想に落ち着く(いや別に僕も彼女作るために努力なんてしてなかったけど。したことと言えば車に轢かれただけだし)。

ぐるぐる思うところはあれど、とりあえず彼女に質問をぶつける。「えと、これ訊いていいことかどうかわかんないけど、え、なんでやめるの急に」

「そりゃーあんたに彼女ができたから傷心で」

「えぶ」動揺しすぎて飲んだ豆乳が喉仏まで上がってきた。

「はっ、嘘に決まってんでしょーがよ」

ふんつと鼻で笑いながら身を乗り出し、カレーのこびりついたス

ブーンの裏を僕の鼻先にぐりぐりっつと押し付けてくる余莉。

「ゴトシーよゴトシー」

「えあの、ダイレクトにカレーくさいんだけど」

「実はさーとんでもないチャンスが巡ってきたんだわゴトシーのほうであたし、で、だからこの際スパツと大学やめちやってマジで本格的に腰据えようかなーって思ってたさ。 悪魔祓いに」

「うんえっと、まずスプーン鼻に押し付けるのやめてもらっても」

全部端折って結論から言う。

余野余莉はエクソシストだ。

なるほど、全部端折るとなにかなんだか全くわかんなくなる事が証明できたので、やっぱりちゃんと順を追って説明する。

余莉は高校時代から悪魔祓いの祈祷師つまりいわゆるエクソシストを生業にしている、なんでそんな仕事やってんのって出会ってわりとすぐの頃に訊いたことあったんだけど彼女の答えは「簡単に儲かるから。あと家系。ばあちゃんイタコだし」だそうで、ふうん人生色々だなあと思った。あとばあちゃんイタコだしって理由はよく意味がわからないなあとも思った。余談だけどエクソシストっていうと某映画（某映画っていうかタイトルまんまだけど）の影響でブリッジしながら階段を降りてくるすげえ顔したあれのことをエクソシストっていう名の化け物だと思っちゃってる人が多分世界に二割くらいいると思うんだけど実はそうじゃなくてあの化け物の名前はリーガンでというか化け物じゃなくてあれはただの十二歳の女の子です。余談終わり。で、余莉がエクソシストやってるって話、そうつまり余莉があの日あのおときあの場所であの背広の男性に唾を吐きかけてたあれ、あれこそ悪魔祓いの儀式の一例なんだけど、でもなんだかそんな職業・儀式・存在を真に受け出すと急に世の中の全てがフィクションっぽくなるし、というかそもそも今現在の僕の生活にとってわりかし重要度の低い要素なのでやっぱりエクソシス

ト関連の説明やエピソードはがつつり端折ることにする（そういう退魔系青春ストーリーに興味ある人は化物語とかそのへん読めばいいんじゃない）。

閑話休題。

余莉が、ようやく僕の鼻先からスプーンを離す。

「つかあれ？　むずるにあたし国際エクソシスト協会の話ってしたことあったっけか」

鼻のてっぺんにこびり付いたカレールーをハンカチで拭きながら、僕は大きく頷いてみせる。

忘れもしないその協会の名を余莉から初めて聞いたとき、あー出た、これこそフィクションの真骨頂、これは確定的明らかに非実在だなどと息巻きながらヤフッたら（ヤフー派なので僕）そのフィクションナルなネーミングの組織は当たり前のような顔をして堂々と実在していて、あ、僕は今現実と虚構の境界線を目撃してるのかも知れない、と妙に感動させられた記憶。

「あのねあたし今どけー案件エクソシスムやってんだけどさ、なんと、そのレポート作って提出すれば国エク（略称らしい）が一級認定くれるらしいんだ。へへ、すごいでしょ？　すごくない？　今あたし個人エクソシストだけどさ、やっぱね、確固たる組織からちゃんと認められてその傘下に入れるってのはでかいと思うわけ。地に足着くと思うわけ」

地に足もなにもエクソシストって仕事自体まず現実に足着けてないよなー（あとレポート提出すれば認定してくれるとか結構庶民的なんだな国エク）とか思いながらも無言でとりあえず頷いておく。「で一級とつたらあたしロシア行くの。あれならあんたも一緒に来ない？」

「え行かない」

「え来てよ」

「えやだよ」

「えなんでよ」

「えなんでというかその前になんでロシア」

「えエクソシストといえはロシアに決まってるじゃん」

「え決まってるんだそれ」

「えあんた何年エクソシスってるの」

「えエクソシスってるつもり皆無だけど僕」

「えってかどうでもいいからロシア来いよむずる」

「え全然どうでもよくないし行かないよ僕は」

ぶっはあああ、と肩をすくめながら大げさにため息をつく余莉。

「あのねーあんたねー、その体質活かさないのはもったいないと思うよマジで。ほんとのほんとにまたとない悪魔媒体質なんだからさあむずる」

ぶっはあああ、と今度は僕が大げさにため息をついてしまう。

悪魔媒体質。

いまだに自分ではよくわからないんだけど、余莉いわく、僕は超がつくほどの『悪魔媒体質』らしい。なにそれ 要は悪魔を吸い付けやすい体質ということ、らしい。余莉がエクソシズムする際（エクソシズムってまずその単語なんだよって思うけど）その最後の仕上げとして、悪魔憑きの人間から飛び出した黒いもやもやとしたもの（まあ悪魔なんだけど）を僕が吸い込み、ごくんと飲み込んで完了。落着。そんな流れを余莉に連れられ引つ張られ、しぶしぶ、高一の頃から月一、二ほどのペースでこなしてるんだけどでも体的にはなんら変化も問題もなく至って健康で高校のときなんて皆勤賞とってるし逆にむしろ意外と毎月悪魔を摂取することが健康維持の秘訣なのかも知れないっていやそういうフィクショナルな話は今はどうでもよくてなにせ僕は彼女ができて言うところのリアルが充実し始めた世界に生きているわけで……あ。

そっだ。

とんでもなく重要なことを思い出した。

「あのさ余莉、ちよっと訊きたいことあるんだけど」

「んーなに悪魔の数？ 一説によれば世界の悪魔総数は6666x

666×66×66〓17億5806万4176つて言われてんだ  
けどでもルターはいやそんなもんじゃなない悪魔の総数は2兆665  
8億6674万6664」

「あうん、ごめん訊きたいことそれじゃない」

「じゃあなに悪魔の嫌いなもの？ めちゃくちやあるわそんなもん、  
ロザリオ聖書聖水聖体とかはマストとしてあと唾吐きかけられんのが  
嫌いっつってだからあたしいっつも執拗にそれ実行してんだけど  
悪魔に限らずそんなもんみんな嫌いよねー普通、あーあと意外なと  
ころで言えばにんにく玉ねぎ豚と塩とかが嫌いだからつまりあたし  
が今食べてるカレー実は結構どんぴしゃなのよこれっつーかあたし  
ほんとはBランチ魚フライ盛り合わせ食べたいのに今夜の被いに備  
えてしょーがなくカレー食ってるわけであたしほんと根っからのエ  
クソシ」

「あうん、違う。ちよつと悪魔から一回離れよう余莉」

「え、離れんの？」

と、余莉が至極真顔でメガネを一度ずり上げる。

「え、むずる、逆に訊きたいんだけど、悪魔から離れたあたしに一  
体なにか残んのよ。悪魔のないあたしなんてただのモテない処女だ  
ぞ？」

うーん自分で言っつて悲しくならないのかなーと複雑な心境にな  
りながら僕は気持ち明るめの声色で、

「いや、うん、えつと、僕は悪魔から離れた余莉に、純粹に女の子  
として意見をもらいたいことがあつて」

「へ？ ……女として？ あたしに？ ……えーそっかあ、は、へ

へへ、あそつ」

ぼさぼさの髪を照れくさそうにむしゃむしゃ掻きながら、ちよつ  
とはにかんだりする余莉。

「よーしそれならなんでも答えてやるーじゃんか。女として。へへ  
へ、女として。うん、でなによ」

「（よっほど嬉しかったんだなあ）あーえつと、その……実は僕、

明日、仰々崎と初めてデート行くんだけど」

「よっ！ 憎いね大将っ！ 女として、あたしがバシッとサポートしてやるから安心しな大将っ！ 女としてっ！ へへへ、で？」

「（よっほど嬉しかったんだなあ）うん、あの……服って、どういうの着てけばいいかなーって」

「フークウ？」

WHO COOL? に酷似した発音で声を上げ、余莉が僕を見たまま停止する。

そのまま。

五秒が過ぎる。

……十秒が過ぎる。

……一分が過ぎる。

余莉の唇がゆっくりと開く。

「じゃあ黒」じゃあってなんだよ。

\* \* \*

「ふうん。それで無月くん、今日、そんな真っ黒な服なの？」

春の日差し暖かな五月某日。

春の日差し暖かに降り注ぐとあるスタバの窓際の席。

仰々崎はくすくす笑いながら、じーっと僕を見つめる。目が合う。うわーまつげ長、とか考えて妙に意識してしまい、ふわふわと目をそらしながら、全然何がなんだかわからず超適当に頼んだエスプレッソだかうんぬんを一口。うえ苦。『うえ苦』っていう感想を顔に出さないよう我慢しながら、

「えと……変、だった？ 服、これ」恐る恐る尋ねてみる。

実際、僕は余莉にアドバイスされたとおり限りなく喪服ライクな上から下まで全体的に黒で統一したコーディネートでデートに挑んでいた。

仰々崎はふるふると首を振り、キャラメルマキアートだかなんだ

か（全然関係ないけどキャラメルマキアートって僕キャラメル巻きARTっていう前衛芸術の類だと思ってた中学の頃）を一口飲み、「変じゃないよ？ ただ……そういうこと訊いたりできる仲いい女の子がいるんだなあと思って、ちよつとだけ……やきもち妬いちゃったかも、なんて」

くすつと悪戯っぽく目を細めて笑う仰々崎。わー、こういうの僕知ってる、夢とマンガで見たことある。充ち始めた自分のリアルを改めて実感して、僕はひっそり心の中で僕を轢き逃げてくれたトラックの運ちゃんに礼を言う。

「でも、なんかあれだね」

ほら、と仰々崎が自分の服（付き合い始めた日とはデザインが違うシックめな黒のワンピース）を指差しながら楽しそうに、

「私も今日、服、真っ黒だし、なんかお揃いみたいで嬉しいかも」  
うわーキスしたい、とか童貞力高い感情がむくむく湧き上がってしまったってあー冷静になろうと自分を律する意味を込めエスプレッソだかうんぬんをもう一口。くおー苦。舌洗いたい。

「それにね」

仰々崎が前髪をふんわり手でかき上げながら静かに言う。

「私、これから無月くんと一緒にいきたいところあるから、その服ちよつどいいよ」

そしてふんわり柔らかく微笑む仰々崎、を見てうわーキスしようかなもう今ここでと一人激しくなる動悸を抑えるべく思い切ってエスプレッソを一気に飲み干し苦くて苦くてちよつと泣く僕。

\* \* \*

で。

今、僕と仰々崎は誰だか知らない人の葬儀会場前にいる。

なかなか大きな日本風の平屋建て家屋。

『嶋村家葬儀式場』という看板。

白と黒、縦線の垂れ幕。

そんなしめやかな光景をぱしぱし写メに収め、振り返る仰々崎。

「じゃあ行こっか無月くん」

「あのちよつといいかな」

「あ、ご香典なら大丈夫だよ、私持ってきてるから」

「あうん、そんな心配はしてなくて」

「あ、ご焼香のやりかた？ 簡単簡単、私が教えてあげるから心配してない、うん。じゃなくて」

「右手の親指と人差し指と中指で抹香をつまみ上げて目を瞑り額の高さまで掲」

「ふうん簡単だねー違って違って違ってさ」

むっつと頬を膨らませ、仰々崎はちよつと怒ったような顔をする。

「もー、ちゃんと聞いてよ、せつかく人が真面目にご焼香講座してるのに」

「ごめん、いやごめんってかあのさ仰々崎、一個だけ質問。えっとすつと嶋村家を指差し「ここ、誰の家？」

「嶋村さんでしょ？」きよとんとした顔で答える仰々崎。

「嶋村さんって、知り合い？」

「そんなわけないでしょ？」更にきよとん顔を深める仰々崎。

「なんで知らない人のお葬式に？」

『一個だけ質問』という前提条件を軽々覆し、僕が三つ目の質問をぶつけると、

「楽しいからに決まってるでしょ？」

仰々崎は、笑顔でゆるつと首を傾げた。

黒くて長い長い長い髪が微かに揺れた。

そういうわけで、僕の人生初デートは葬式と相成った。

今回のデートで得たもの

金持ちげな人の葬式は全然無関係な一般人でも受付で「ご愁傷様

でした」って悲しげにお辞儀して記帳すれば入れちゃうもんなんだー、という比較的どうでもいい知識。

今回のデートのハイライト

お坊さんが読経している最中、小さくすすり泣く参列者たち、その顔をちら見しながら恍惚とした表情を浮かべる仰々崎、の、その横顔をちら見しながら呆然とした表情を浮かべる僕。

葬式デートからの帰り道。

隣りを歩く仰々崎が訊いてもないのに喋りだす。

「うーん、今日のお葬式は私的には百点満点中六十三点ってところかな。なんていうか、遺族にちよつと不幸感が足りない感じしたよね。もつとこう、明日から私たちどうやって生きていけばいいのーみたいな絶望的空氣が欲しかったなあ私は。まあお金持ちっぽかったしそういう絶望感とは無縁なのかなあ、残念。うん、でもおおむね満足。よし、ね、無月くん、次のデートどこ行こっか……って、えつとあのね、私ね実は、離婚裁判傍聴してみたいなーって思ってるんだ。不幸感高そうだね？ それも浮気が原因とかなら最高じゃない？ 夫婦で口汚い罵り合いとかしてくれたら私失神しちゃうんだけどなーなんて、えへへ」

わー。  
こんなに饒舌に喋るんだ仰々崎。僕は妙に嬉しくなった。

普段、大学ではクールでちよつと近寄り難いオーラさえ出してる仰々崎がこうして楽しそうに喋ってくれるなんて、僕しか見たことない彼女の本当の一面的なプレミアム感。からの、あー僕ら付き合ってるんだなーという実感。そして、この上ない満足感。そんな色々な感を抱えながらとりあえず僕は、

「よし、行こう、離婚裁判」

笑顔で頷いた。

その夜。

『ふみです。無月くん、今日はありがとう。すっごく楽しかったよ（ハートの絵文字） 恥ずかしくて言えなかったけど、ご焼香上げるところ、すごくかっこよかったです（にっこり笑顔の絵文字） また一緒にお葬式行こうね（おばけの絵文字）それじゃあまた明日、大学で。おやすみなさい（ZZZの絵文字）』  
時間にしてかれこれ一時間、回数にしてかれこれ三桁回、僕は仰々崎からのメールを読み返して、一人にまにましている@自室のベッド上。

あー女の子と付き合っつてこういうことなんだという高揚感。リア充爆発しろと言われれば甘んじて爆発してやってもいいと思えるくらいの多幸福感（でも実際比喻でなくガチで物理的に爆発したらその不幸を仰々崎は喜ぶだろうなーとか思ったり）。

ベッドに寝転がりながら、別れ際、仰々崎が言っていたことをぼんやり思い出す。彼女いわく、

「幸せって相対的なものだから、お葬式とか裁判とか轢き逃げ現場とかで不幸な人の不幸な出来事を目の当たりにして、それでやっとそっか自分って幸せなんだなーって認識できるんだよ、無月くん」  
なるほどなあ、と天井を眺めながら一人納得する。

確かに今の僕は幸せだ。

最近いつも無意識の内に、彼女がいなかった頃の自分と今の自分を比べている。そうすることで今のこの幸せを実感している。

更に言えば、恋人がいらない余莉の悔しそうな顔、しょぼくれた目（注・なかば捏造された記憶）。そういうものを思い出すことで自分が幸せだという実感にブーストがかかる（ごめん余莉）。  
なるほど。

確かに幸せは相対的なものらしい。ふんふんと一人頷く。  
でも。

だからって他人の不幸を自ら探しに行くのはちょっとやりすぎの気がしないでもない。仰々崎本人から聞いた話だけど、彼女はいつ

如何なるときにでも葬式に参列できるよう、常に黒い服を着、バッグの中に数珠と香典袋を常備してるらしい。うーん、仰々崎、動物占いやつたら絶対ハイエナだろうなー（ハイエナなんていないよとか以前にまず動物占いの懐かしさに着目して頂きたい）と、バニーガールのな感じでハイエナガールのコスプレをした仰々崎（正直全然絵が浮かばない）に死肉を喰られる自分の姿を想像しながらあー意外に悪くないんじゃないでしょうかと新たな性癖に目覚めつつメーイルをもう一回読もうと携帯を開いた、そのとき。

がちやり、とドアを開ける音、と共に。

「セックスは？」

まあまあ音量と共に、ミザリが部屋に入ってきた。

うーん、いくら兄妹だからって入ってくるときはノックくらい、親しき仲にもノックありだろーと頭の中でぶつくさ言いつつ、ベッドから上半身を起こしてミザリのほうを見る。赤くて薄手のタンクトップに赤いチェックのミニスカートに赤いぱつぱつのニーソックスという真っ赤かつ露出度高めの部屋着。更に髪（短めのツインテールにしているんだけど短すぎてテールっぽいうかただの大きな毛玉）も真っ赤に染めててこれこいつこの髪色高校で怒られないのかなーとぼんやり。私立だしそのへんゆるいのかなーという偏見。

「セックスは？」

もう一回、まあまあ音量で言うミザリ。

「……うーん、ミザリ、文脈くれないかな」

ふーんと大きさにため息をつきながらミザリがドアをばったんと勢いよく閉め、床、カーペットの上におもむろにあぐらをかく。

「兄ちゃん彼女できたでしょ？ おめでとう。今日初デートだったでしょ？ おめでとう。で、セックスは？」

僕の希望どおり文脈はわかったんだけど、それ以前になんというか高一女子が兄貴にでかかどと訊くことじゃない気がするんだけどこれは僕の貞操観念が先時代的なんだろうかうんぬん。

とりあえず、そういうことは、してないので、

「してないけど」正直に答えた。

ミザリはほっとしたような、でもどこか訝しげな表情を浮かべ、

「してないけど？ けど、なに？」

「え？」

「してないけどそのうちしたいと思ってる？ そういうこと？」

「いや」

「今日はしてないけどそのうちしたいと思ってるってゆくゆくは一姫二太郎がつつりこしらえたいと思ってる？ そういうこと？」

「ミザリちよつと行間を読みすぎじゃ」

「良いと思いますっ！」

ぐっ、と爽やかな笑顔でサムアップするミザリ。そのテンションについていけないのでとりあえず無言無表情の僕。

「やっぱりね兄ちゃん、人間はセックスしてなんぼだとあたし思うよ。人間はセックスによつて生まれてきて、そしてセックスするために生まれてきたんだって聖書にも書いてあつたとしてもおかしくないのに書いてなかったからあたし自分で書き加えたんだけどそれはそれとしてさ、セックス早くしたほうがいいよ、うん、セックス早くしよう兄ちゃん、セックスしよう兄ちゃん」

「最後の一節だけ抜き出すとフランス書院みたくなる発言は控えようミザリ」

こいつちよつと前までこんな性格じゃなかったけどなー高校入つてどっか吹っ切れたのかなーそれとももしかして彼氏とかできたのかなーあーそれありそうだなー、と妹の変化に思いを馳せる夜十一時。

\* \* \*

「……まあそんな感じで、ミザリの貞操観念が最近なんだか近未来的、って話」

ふわ、とあくび混じりで喋り終える僕。

「ふーんザリ子そんななんだー、ふーん。まーいいじゃん、そういうシモいことに積極的になる歳でしょ高一なんつつつたら」

深夜の公園に余莉の声が響く。

僕は今日も今日とて寝ているところを携帯で叩き起こされ呼び出され、エクソシズムの手伝いをさせられている。ちなみに現在僕の出番はまだなく、待機中。ベンチに座ってばーっと余莉の背中を見ている。

「でもあれだね、むずる、妹がそういうシモいファクターに興味津々ってそれもほとんどエロマンガだねーよかったじゃん」

とか言いながらけらけら笑う余莉は、今、濃紺のスカートスーツに身を包んだ見知らぬポニーテールのOLさんと一定の距離を保ったまま対峙している。

そのOLさんかというと、犬だか猫だかみたいな感じで地面に手をつき背中を高く上げた四つん這いの姿勢で、ぎらぎら目を光らせてぐるぐる呻っていた。これだけでも十分悪魔に憑かれてる感出てるけど、それに加えて彼女は時おり口から青白い炎を吹いたり鼻から灰色の煙を立ち上らせたり（いやリアルに）するので、僕の素人目から見てもあっち側の住人であることが明白だった。余莉が大学やめてロシアに行ったら、こういうあっち側の住人に会うこともなくなるんだろとか、と眠い頭で考える。というか頭がとんでもなく眠い。おそらくノンレム睡眠時に起こされたんだと思う。世界がふらふらする。

「余莉、もう終わりそう？」

「ん？ ううん、まだ全然かかるーぜ」

「あそう」

首を軽くぱきぱき鳴らしながら僕はベンチから立ち上がり、すぐそば、ブランコの脇にある小さな自販機へのろろ歩く。徒歩五秒で到着。とりあえずコーヒーでも飲もうという思惑。ポケットの中にあつた硬貨数枚を投入して顔を上げ、ラインナップを確認する。右から順にサイダーサイダーサイダーサイダーサイダーサイダーほ

うじ茶おしるこ。うーん偏り方が著しい。しょうがないのでこの中で一番力フェインが含まれているもの即ちほうじ茶をプッシュ。がこん。身を屈めて缶を取り出す。熱っ。ああ、ホットだ。ベタなトランプに引っかけた。はあ、と半笑いでため息をつきながら、なんだかベンチに戻る気力を削がれたので最寄のブランコに座る。プルトップを開け、しぶしぶほうじ茶を飲む。うん、これじゃない。

一息つきながらふと顔を上げると、ちょうど四つん這いのOLが余莉に飛び掛るところだった。獣的、そうとしか言いようがない圧倒的速度。しかし余莉はふわりと余裕かつ華麗（余裕カツカレー）にその獣的体当たりを交わしながら、手に持つ聖書でOLの後頭部にすこーんと一発食らわせる。ぐうぐうおおおおと地の底から響くような低いうめき声を漏らしてOLが地面をのたうち回る。効果絶大。聖書って読むものだと思ってたけど打撃系の武器だったんだなーと実感しながらブランコをゆるく漕ぎ漕ぎほうじ茶をまた一口ほかほか。

「てかさーむずるさー今日デートだったんでしょー？ どーだった？ 感想力モン」

余莉がゆっくりじりじりOLと一定の距離をとりながら、僕に背を見せたまま大きな声で言う。悪魔憑きハケモノとやりあいながらこうして余裕で雑談できるあたり、余莉はやっぱり国エクから認められて世界的エクソシストとして第一線で活躍すべき人間なのかも、と一人で納得する。

「おーい聞いてるー？ 感想求めてんだけどあたしー」

「え、ああうん、えっと、楽しかった」

「ど下手な読書感想文かあんたは」

「けっ、とていなながら（実際そう口に出して言う人少ないと思うんだけど余莉は確かにそう言った）パーカーのポケットからがさごそとなにやら十字架型のアイテム（いや十字架そのものなんだけど）を取り出し、威嚇するようにOLに見せつける。見せつけながらまた雑談。」

「『楽しかった』じゃなくてー、もつとあるでしょーよ具体的な、なんだ、こう、手繋いだとか、キスしたとか、キスしてないけどキスしそうになったとかキスしそうにもなっていないけど常時キスしたかったとか常時キスしたかったけどキスできなかったからキスしますすしたくなかったとか竹垣に竹立て掛けてたかったけど立て掛ける竹なかったからますます竹立て掛けてたくなかったとか」

特にツツコミはせず総スルーしながら僕は、

「まあ、そりゃ、キスしたいなーとは何度か思ったけど」  
「うわマジか」

僕に言ってるのか独り言なのか判別できない絶妙な音量でそう呟いて、三秒の静寂の後 余莉は突然くるりと振り向き、僕を見た。まっすぐ目が合う。

「ね。……キスってやっぱ、したくなるもん？」

なぜか神妙な面持ちの余莉。

「え……ああ、まあ、うん、そう、だね、うん」

なぜかどぎまぎしてしまう僕。

「好きなんだ？ 彼女のこと」

静かなトーンで余莉が言う。僕は一瞬、黙ってしまう。けど、  
「うん」

素直に頷いておく。なんだろう、とんでもなく恥ずかしい。

「ふーん」

余莉は、なにか考え事でもするような表情で少しだけ俯いた。

「そっかあ、むずる……好きな奴で来たんだー」

小さく小さく、誰に言うでもなく呟く余莉。

と、突如。

静かに余莉の背後数メートルまで忍び寄っていたOL（いることちよつと忘れてた）が、ぎいいいいっ！ と雄叫びを上げ、もうもうと火を吹きながら余莉の背中に飛び掛った。

「余っ」僕が声を上げるより早く、

「あーうるせえなあああもうー！」

叫び、振り返りながら、余莉が十字架をぶんと〇に投げつける（実際ぶんとという空を切る音はつきり）。

額に十字架がクリーンヒットした〇は、ぐうぐうぐうぐう！  
とこの世のものじゃないような（いや実際悪魔だしこの世のものじゃないんだけど）鳴き声を上げながら、四つん這いで走り、一目散に逃げ去っていった。

「……そっかあ、むずる、好きな奴できたんだ」

僕に背を向けたまま、消え入りそうな声でつぶやく余莉。  
そして訪れる、圧倒的な静けさ。

……。

……ん？

……あれ？

え、なにこの変な空気。

僕に背を向けたまま、余莉は心なしか大きめに俯いていて、少し肩を震わせたりして、あれ？ え、なにこれ。え？  
もしかして。

余莉、僕のこと。

好「ぶつはあー」唐突に余莉が天に向かってしゅぱつと腕を伸ばし、大きく大きく背伸びをした。完全にびくつとした僕。

ゆっくり振り返り、僕を見る余莉の顔は、にっこり笑顔。

「うし、おしまい。帰ろーむずる」と、あっけらん。

「え、あ、ああ、うん」

僕は拍子抜け＋安心＋なんだかちよつと残念（自分でもよくわからないけど残念）になった。というか、

「あれ、余莉、僕、まだ飲み込んでないよ黒い煙。いいの？ てか逃げちゃったしあの人」

「あーうん、いーのいーの。最初っからわかってたことなんだけど今日あんたの出番ないんだ。まだあの人全然被えてなくてさ、吐き出す段階まで来てないのよねー。あと、そうだなー少なくとも五、六回は被わないとあんたの出番来ない感じ。うん。理解？」

「……理解」と言いながらも、じゃあなんで呼び出したんだという疑問が湧く。と、それを見透かしたかのように、

「今日はねー、あんたのノロケ話が聞きたかっただけー、へっへへ悪趣味だろあたし」

余莉が、メガネの奥の瞳がった目を細めて笑った。僕も、わけはわからないけどとりあえず、一緒に小さく笑つといた。

「じゃそろそろほんとに帰ろーむずる、っーかいつまでブランコぶらぶらやってんだお前気持ち悪い」

「気持ち悪くはないだろ別に」と言いながら、大学生の男が深夜ほうじ茶片手にブランコぶらぶらしてる図を頭の中に思い描くとあー確かに結構気持ち悪い。慌てて立ち上がる。余莉はぼさぼさの髪をむしゃむしゃ掻きながら、

「つかあたし今日一限なんだわ、あークソ考えただけで眠みいー。

あんたは？」

「ん、三限から」

「うわずっりいー悪魔ずりいー」

超・鬼 的な言い回しもエクソシストにかかればこのとおり、とか僕がぼんやり考えていると、余莉はそそくさとさつきぶん投げた十字架を拾い上げ、すたすた僕のすぐそば、数センチ距離まで近寄ってくる。彼女のメガネ、そのレンズに付いた指紋がくつきりわかる距離。

余莉が、ぎゅいつと僕の鼻っ面に十字架の先端を押し付け、ぐりぐりしながら囁く。

「あのさ、あたしもしたことねーからこれはあくまで予想だけど」

「むんまみ（うんなに？ って言ったんだけど鼻が十字架で圧迫されててやむなくムンマミに）」

「なんっーか キス、したら、ガラツと世界変わんじゃねーかなあつて思っ」

「……あにほれ（なにそれ？ って言ったんだけど鼻が十字架で）」  
「いやだからさ、さっさとしちゃえばいいんじゃないかなーって

思ってたさ！ レッツトライ・チェインジュアワールド・SOOOO  
ONって思ってたさ！ OK？」

よくわからない勢い任せの英語を使い、にかっ歯を見せ笑う余  
莉。に、僕は、

「ほんなえーごろくでロシアいえるの余莉」

「なに言っつつか全然わかんない」

（答え・そんな英語力でロシア行けるの余莉）

仰々崎不美の不幸せで幸せな五月（後編）

五月の初め、ゴールデンウィーク明け。

僕は仰々崎不美と出会い、付き合い始めた。

余野余利は、僕に言った。

「なんつーか キス、したら、ガラツと世界変わんじゃねーかな  
あっと思う」

時は流れ、五月もそろそろ終わる第四週。

まだ僕は、キスしていない。

\* \* \*

付き合い始めて、二週間以上が過ぎた。

僕と仰々崎は、幾度となくデートを重ねていた。

休日はもちろんのこと、場合によっては大学が終わったあと待ち  
合わせて夕方頃から出掛けることもあった。あまりにも理想的。あ  
まりにも無双的。四、五回目のデートからは、さすがに手ぐらいは  
繋ぐようになった。感想？ むっちゃんくちや柔らかい。一流ホテル  
とかの朝食で出るふわっふわの食パン、がスライスされる前の長ー

い本体、のど真ん中にはふんつと手を突っ込んでその生地を掴み衝動に任せて思いつきりもにゆもにゆしたその感覚に近い（してみたよねそんな荒業）。

こうなつてくると、それ以上先のことだつてしたいなあと思うのが人間で、それ以上先のことすなわちキス、いやなんでお前そんなにキスにこだわるんだよつて思われるかも知れないけどじゃあ逆に訊くけどなんでキスにこだわらないんですか？ こだわるでしょう。したことないんだから。できる限り最高のシチュエーションで成し遂げたいと思うでしょう。だつてしたことないんだから。

しかし。

そんな僕の想い願い祈り空しく届かず成し遂げられず、ただ悶々とする日々が続いてしまっている現在。打破したい、打破できない、超えられない初キスの壁。なぜ超えられないのか。それはひとえに僕の理想が高すぎることに起因していると思われた。先述の「最高のシチュエーションで成し遂げたい」という願望。これの難易度が高い。なぜなら。

基本的に仰々崎と僕のデートは「他人の不幸探し」がメインだからだ。

例を挙げる。

「むずるくん（先週くらいから下の名前で呼ばれるようになった）、着いたよ！ ここ、ほら、こないだ通り魔が出たところ！ わーニユースで見たのとおんなじ。あ、綺麗な献花！ 写真撮ろつと、えへへ」

「むずるくん、着いたよ！ ここ、ほら、東尋坊！ すごいね、生で見ると迫力あるね。ここから何万人（盛りすぎだと思う）もの人が人生に絶望して飛び降りたんだね！ うーん遠かったけど来てよかったあー。あ、せっかくだし誰かが飛び降りるまで陰で隠れて待つてよっか、えへへ」

「むずるくん、着いたよ！　ここ、ほら、浮気専門の探偵事務所！」

「むずるくん、着いたよ！　ここ、ほら、ハローワーク！」

「むずるくん、着いたよ！　ここ、ほら、マグロ漁船！」

そんなムードもへったくれもない場所でキスできるわけがない。したくない。なにが悲しくてそんな湿っぽい場所で一生の思い出を作らなきゃいけないのか。

でも。

マグロ漁船とかで妥協しとくべきだったなあ、と今になって思う。

\* \* \*

「じゃあむずるくん、私、先に中で待ってるから、私が携帯鳴らしたら入ってきて、それを店員さんに突き付けて例のせりふ、よろしくねっ」

子供みたいに無邪気に微笑みながら、待ちきれないといった様子でびよんびよん小さく跳ねたりなんかする仰々崎、を、ぼーっと見ている僕、の顔にはドンキで買ったジェイソンマスク、そして右手にはドンキで買ったおもちゃのピストル。

夕方。

大学近くのローソン前。

今日のデート場所はここだ。

きよろきよろとマスクの中で目だけ動かす。講義の終わった生徒たちが僕をちらちら見ながら通り過ぎていくのが見える。うわ恥ずかし。嫌な汗が額を伝う。考えてみれば奇しくも今日は二十三日の金曜日ということなんだかニアミス感がむんむん出ていて微妙に恥ずかしさに相乗効果が加わっていて、つまり総じて帰りたい。僕

がたらふく汗をかいていると、

「ん」

と、仰々崎が自分の口に指を入れていた。そして、にゅっと取り出したるは二寸釘一（目算）、を僕に、「はい」と手渡す。とりあえずもらつとく。ズボンのポケットに入れる。

「よし、じゃ、いつてきます！」

笑顔で軽く手を振って、長い長い髪をふんわり翻し、仰々崎は口ーソンの中へ吸い込まれていった。

あとに残されたジェイソンつまり僕は一人佇み、なんでこうなっちゃったんだろうとため息をつく。

なんでこうなっちゃったんだろう、に対する回答は以下。

仰々崎不美は現在、誰かに降りかかった不幸を見つけに行くという受身な姿勢では飽き足らず、自発的に誰かに不幸を与えることに目覚めていた。良い言い方をすれば、自分の思い描く未来を掴むことに積極的になったということ、悪い言い方をすれば、タガがはずれた、ということだ。

で。

今から何をやるのかっていうと、もちろんコンビニ強盗だ。

いや、コンビニ強盗することでコンビニの店員ないしコンビニの店長ないしコンビニの経営ないしコンビニ業界全体等に対して果たして不幸を与えることができるのかっていう疑問はもちろん湧くし、もちろん与えることはできないと僕は思うんだけど、しかしタガのはずれきつた仰々崎には何を言っても通じなかった。ゆえに僕は沈黙。こうしてコンビニ前で一人佇むに至る。

ぶつぶぶ、とポケットの中で携帯が震えた。

決行の時を知らせる合図だ。

コンビニ内、雑誌コーナーにいる仰々崎が、片手に握った携帯をふんわりと僕に向けて振っているのが見える。うーん。というかこんな近くで待機してたら店員とかも気づいてるよなー僕の存在に。

うーん。

とりあえず、恋人の願いに答えるべく。

重い重い足取りで僕は歩き始める。

モーゼの如く開く自動ドア。

進んで進んでレジの前。

啞然とする女子店員。

あ、結構可愛い。

女子高生？

丸顔。

まん丸い目。

いやまあそれはいい。

右手に握ったおもちゃの凶器を。

すっと速やかに彼女の額に突き付けて。

仰々崎から仕込まれた例のセリフを口にする。

「か」ねをだせ、という五文字。ダメだ、口に出せない。

「か」ねをだせ、言えないダメだこれを言うと僕は何かを失う。

汗。汗。汗。震える手。震える足。震える口、から、出た言葉。

「か」……「らあげクンください」

「……あ、はい」

店員は、いそいそホットスナックをケースから取り出しにかかる。

僕は完全に頭真っ白のまま、ダッシュで店内からエスケープした。

\* \* \*

はあ、と何度目かわからない湿ったため息をつく。

もう辺りはすっかり暗くなっていた。

走って走ってローソンから離れて大学裏にある小さな公園、前に余莉が悪魔憑きのOLとやりあった例の公園、のベンチに、僕は仰々崎と並んで座っている。

「ごめん、ほんとに」

僕は何度目かわからない謝罪の言葉を吐き出す。仰々崎は無言で、

何かを考えるようにただじつと自分の足先か地面かを見ている。その横顔をそつと見つめる。長いまつげ、白い肌、大きくてどこか物憂げな目、小さいながらもふっくらした唇。ああ、キスとか程遠くなっちゃったなあと改めて根性のない自分を呪う。恋人を喜ばせるために犯罪に走ることもできないのか僕はつていやそれで全然正常なんだけどもうーん。はあ、とまたため息。

「ん」

と、仰々崎が自分の口に指を入れた。そして、にゅっと取り出したるは二寸釘一（二本目）、を僕に、無言で手渡す。とりあえずもらつとく一（二回目）。ズボンのポケットに入れる。

そして、しばらく、静寂。

「……むずるくん、私ね」

仰々崎が小さく呟く。

「私、世の中の人全員を不幸にしたいの」

視線はまつすぐ地面を捉えたまま。

「今考えてるのは、ダンプカーで都庁に突っ込んで行政を粉碎」  
なるほど、そうか、やっとわかった。

仰々崎つて変だ。

明らかに常軌を逸し始めた仰々崎の発言に静かなるドン引き（くだらない）しながら僕はすべてを理解する。この子変だ。思考が向こう側だ。だってもう彼女が言ってるのは不幸とかじゃなくてただのテロリズムだ。なんだろう、どこでどう間違つてこの子こんなになっちゃったんだ。  
と。

仰々崎が顔を上げ、僕のほうを向く。長い長い髪が静かに揺れる。まつすぐで、ひたむきで、何かを思い詰めたような目。

「私、今、幸せだよ」

か細くて、かすれた声で、だけどはつきり、そう言った。

「むずるくんと付き合い始めてから、毎日がすごく楽しい。すごく幸せ。……でも、だから、その幸せを心から実感したいから、他人

の不幸と比較したいの。もっとたくさん不幸を見たいの。　　だ  
からお願い。むずるくん、一緒に、ダンプで都庁に突っ込んで」

大きな瞳を潤ませて、唇を震わせながら、そう言った。

僕は思う。

ああ、仰々崎は不器用なだけなんだ。

幸せを感じることに不器用で、だから他人の不幸が必要で、そう  
いう不器用で健気で純朴な女の子で、うん、いやもう全然論理性も  
なにもないし自分でも言ってるわけわかんないし正直、正直仰々崎  
のこと超怖いつて思ってる、けど、けど、けど！　そんなこと今は  
もう全部どうでもいい。彼女の、仰々崎の、そういう人としてダメ  
な部分、欠けてる部分、おかしい部分、そういうの全部、今の僕に  
とっては全部どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおでもない。

だって仰々崎は、僕の彼女だ。

人生十九年、初めての彼女だ。

初めての彼女だから、こういう気持ちも初めてだけど、そうか、  
そうかこれが恋なんだ、とか、そんなありふれたありふれたありふ  
れきった気持ちになってしまっただ。　ああ、そうだ。

好きな人の何もかもを肯定してしまうのが恋なのかも知れない。

だったら僕は甘んじて、ダンプで都庁に突っ込もう。

もうなんの迷いも戸惑いもなく、僕は彼女の手を掴み、握り締め  
る。ふわふわの柔らかい手は冷たくて、微かに震えていた。

「仰々崎」

彼女の名前を呼び、それ以上は何も言わずに、僕はただ無言で力  
強く、一度、頷いてみせる。その頷きに僕の想いの全てを乗せる。

瞬間。

ぽふっ、と。

倒れるように、体を預けるように、仰々崎が僕の胸におでこをく  
っつけてきた。

そして、ゆっくり顔を上げ、僕を見上げる仰々崎、の、比喩とか

じやなく言い過ぎとかじゃなく本当に、吸い込まれそうな瞳。

「……ありがとう」

小さく動く彼女の唇。

僕の唇との距離、数センチ あ。

やばい。

これ。

きた。

めくるめく、頭の中で各項目に基づく合否判定を実行。

『場所 公園 合格。』

雰囲気 最高潮 合格。

他人の視線 公園には僕らだけ 合格。

総合評価 君の望む未来が必ずここにある 合格！』

合格判定が下りてゼロコンマ数秒後。

ふわり、と。

僕の唇に、前代未聞の柔らかい感触が。

あ。

あー。

ついにしちゃった、てかうわ、うわーなんだこれ、ほんと柔らか、あと顔近っ、近い、あ僕これ目開けたまんましちゃってる今、あれやばい間違えた、いや間違えてないのかな、でも普通目閉じてするよな、あれでも別にいいのかな、そういう決まった作法とかなのか別に、てか柔らかかつ、あとちょっとあったかい、うわ、あったかい、つかなんだこれ顔近っ、近すぎて顔よくわかんないからほんとにこれが仰々崎かどうか判断する術がない、けど仰々崎だ、うわ、唇、うわ、あれ、なんだ、あれ？ なんだこれ、あれ？

口の中に。

なにかが、侵入してきてる。

ん？ え？ あれ？ これ、もしかして………大人？ 大

人的な？ 嘘ほんとに？ 僕そういうのって結局フィクションかとかえ最近まで、え嘘今僕その当事者？ えここハリウッド？ ぬるつとした、あつたかいものが、ほとんど僕の口の中に、ほとんどどん入ってきて、ん、え仰々崎、ちよつと仰々崎おい仰々崎さすがに積極性すくなくいか仰々崎、いやいやいやいや仰々崎？ そんなに奥まで入ってくる？ 入って、おふ、おえ、いやごめんさすがに嘔吐いちゃった深すぎて、深、げ、おう、おえ、げぶ、え、え無理無理、え無理無理無理無理、喉、仰々崎それもう喉、喉！

ずがばつ、とありつたけの力で仰々崎の体を引き剥がす。ベリベリつと音がしそつなくらいの粘着力、いやほんとに、粘着力という言葉がしつくりくる尋常じゃない力。

離れる僕の顔と彼女の顔。

離れた僕の口と彼女の口 の間に。

びろーんと伸びた、どす黒いお餅的塊が逆アーチ型を形成していた。

うん。

初めてのキスで、それも仰々崎みたいな子とさせて頂いた身分でこんなこと言うのどうかと思うけどごめん言わせてもらっけど、うわー気持ち悪つ。なにこれ気持ち悪つ。口離して顔も離して体も離してるけど、口と口の間に垂れる黒い餅状の塊は離れない。二人の間を繋いで長く長く伸びっぱなし。あと、うん、これが一番目を背けたい事実なんだけど、今、仰々崎、白目剥いてる。わーこれは見たくなかった。怖つ。彼女が初キス直後に白目剥きながら黒い餅吐いてる姿！ 怖つ！ 眼前で繰り広げられるこの大人のトラウマ絵巻をなんとか忘れようと僕は必死で頭をぶんぶん振る。連動してぶんぶん揺れる黒い餅。

突如。

「むずる！ 顎外れるくらい口開けてっ！ さもなくば死っ！」

聞き慣れた声がベンチの背後から響く、と共に、ずばんと野生動物的速度で仰々崎の背後に飛び出た何者か。



ひゅっと、うーんなんだろう、ほらいわゆるバラエティーでよく見る、二人で平たいゴムの端と端を噛んで伸ばして伸ばしてぱっちん痛ってえっていうあの往年のゴムパツチンのダチヨウ倶楽部イズムに満ち満ちた勢いで飛び出して、そのまま僕の口の中に、ひゅっ、とん、ごっくん。

完了。

仰々崎が、ぱったりと前にぶっ倒れた。

僕は、どってんと後ろにぶっ倒れた。

目の前に広がる果てしない夜空。

僕の頬を緩く撫でる夜風。

世界を包む夜の静寂。

あ、今日満月だ。

「えーいむずるうー、おっ疲れちゃん。どーだった？ 『憤怒』を司る悪魔、サタン先生のお味は」

余莉が上から僕の顔を覗き込み、チエシヤ猫みたくにやにや笑う。僕はなんのことだか全然わけもわからないし状況把握できるほどまだ頭動いてないし、ついでにいうと味は実際無味無臭だったので、「特に」と返した。

「わー、つまんねー感想。まいいや」

余莉は、赤ブチ四角メガネをゆっくりずり上げて、

「うん、まあよし、ひとまずここまですべて あたしの計画通り、つつつてね。へっへへ」

月明かりでレンズをうつすら煌かせながら、楽しげに得意げに、そして怪しげに笑った。

\* \* \*

結論から言う。

仰々崎不美には悪魔が憑いていたのだ。

それも、強力で凶悪な悪魔。

その名はサタン。

……うーん。『その名は』とか言っつて、いや名前くらいは聞いたことあるけど、でもぶっちゃけサタンとデビルとデーモンになんの違いがあるのか僕にはまったくわからない。けどこれ質問すると少なくとも三時間くらい喋りそうだから僕は余莉に尋ねない。

とりあえず。

余莉いわく、このサタンレベルの悪魔に憑かれた人物が、あと六人いるということだった。どこにっつて、このご町内に。

「え余莉、そんな物騒なのが近所にそんなに固まってるの」

「そ。奇跡。運いいよねーマジで」

余莉は僕の隣でブランコをきこきこやりながら、そんな不謹慎なことをさらっつと言う。

「いやどのへんが運いいのそれ」

「は？ どのへんっつて全部。だつてあたし、その七匹、あーもうぎょーちゃん（仰々崎のことらしい）のは被ったから六匹だけど、全部被い終わってレポートあげたら国際エクソシスト協会に認められるんだつて、これ前にも話したけど」

「え、ああ」

そう言えば、でかい案件エクスシズムが終わったらどうのこうのっつて言っつた気がする。けど、それが、これなのか。自分の彼女が案件として扱われている妙な感覚。

ぎっこぎっこと大きめにブランコをスイングさせながら、余莉が喋る。

「まー大変だったのよこれが。ぎょーちゃんをこの状態に落ち着けるまで、それはそれはまーーー大変だったの。何回バトったか。ぎょーちゃん、今でこそ人の不幸をただ願うくらいいしょぼいレベルまで悪意が落ちたけど、一番やばかったとき、最盛期はもう憤怒の化身、悪魔そのものだったんだから。あんた覚えてるかかわかんないけどあたしは、大学入っつてすぐ一週間くらい休んでただけど、あれ、ぎょーちゃんに頭おもつきし噛まれて三針縫っただわ」

「え三針」思わず、仰々崎のほうを見る。

サタンを吐き出してから意識を失ったまま、ベンチに横になっている仰々崎。が、余莉の頭に噛み付いた。うーん、全然絵が浮かんでこない。浮かぶのは、この公園でいつぞや、余莉に飛び掛つていた火と煙を吹くOLの姿。もしかしたらあの人も、余莉の言うでかい案件のうちのエクシズム一つなのかも知れない、とかぼんやり予想する。

と、余莉がブランコの動きを止め、僕を見た。

「あんた七つの大罪ってわかる？」

「えっと、殺人、窃盗、家賃滞納」

「おいバカ。おいバカ。違うわ。そーゆーんじゃないくて」こほんとわざとらしく咳払いをし、「憤怒傲慢強欲色欲怠惰暴食嫉妬これが七つの大罪。理解？」余莉がメガネをずり上げる。

「えーっと、理解、できない」

ぶはーとため息をつきながら余莉はブランコを降り、そのへんに落ちてる木の枝を掴んで、地面にさらさら文字を書きだした。

「憤怒を司る悪魔・サタン

傲慢を司る悪魔・ルシファア

強欲を司る悪魔・マモン

色欲を司る悪魔・アスモデウス

怠惰を司る悪魔・ベルフェゴール

暴食を司る悪魔・ベルゼバブ

嫉妬を司る悪魔・レビヤタン」

と、いちいち口に出しながら書いてくれたおかげでどうにか把握できたけど、文字だけじゃ正直夜だし暗いしそもそも字汚くてぐちゃぐちゃだし、ので、さっぱり読めない。

そんな僕の気持ち露知らず、書き終わった余莉は満足げに立ち上がり、木の枝をぶんぶん振りながら、

「こーゆう悪魔がいて、あたしはこれを全部仕留めて、国エクから一級認定もらって、ロシアに行きたいわけ。で、あんたは、あたしのような夢を叶えるために、こいつらに取り憑かれた女たちと、恋

して、キスしろ」

「ごめん余莉最後のほう飛躍しすぎてて全然意味わかんない」

ぺっ、と地面に唾を吐く余莉。わー怒ってる、理不尽。

「むずるあんた童貞でしょ？」

急にとんでもない質問をぶつけられた。

「はあ、うん、はい」

とりあえず正直に頷く。

「あんたみたいな童貞に愛されて、キスされることが必須条件なの、このレベルの悪魔を完全に被うためには。ちよつと小難しいっつかそれらしい言い方するなら 穢れのない異性の穢れのない愛情と穢れのない口づけなくして、高位の悪魔を完全に被うことはできない、ってこんなことローマ典礼定式書読みや書いてあんでしょーよ普通に。勉強してよちよつとはさあ自分でさあエクソシズムかじってる身でしようがよあんたもさあーたく」

余莉はそう言い捨てて、ぺっ、とまた地面に唾を吐き捨て、木の枝をポイ捨てた。なるほど、彼女の言葉の三十パーセントも理解できない。

と、そのとき。

かたり、とベンチ方面から小さな物音。

見ると、横になっていた仰々崎が起き上がり、頭を抱えて小さく俯いていた。

「お、起きたなぎょーちゃん」ぽつりとつぶやき、余莉が僕の袖をぐいーつと強く引つ張りながら立ち上がる。僕は引つ張られるがまにわたわたと立ち上がる。きいきい揺れるブランコの音。余莉はすたすたと仰々崎の前まで歩き、

「ぎょーちゃん、これこれ、見て見てこれ、これ」

と、僕の顔の真ん中を指差す。

仰々崎は、ひたすら呆けた表情で、僕を見る。

がつつり目が合う。

青暗い夜の闇の中、公園の小さな街灯につつすら照らされた仰々

崎の、とんでももなく白い肌と、とんでももなく長い髪、大きな目、高い鼻、そして、唇。……クチビル。

自分の唇にあの感触がリアルに蘇り、汗が止まらなくなる僕の体と、仰々崎の唇が、ゆっくりと開く。

そして、はつきり。

「誰？」

そう言った。

「ああん？」

動揺しすぎて思わずドスのきいた声が出た。

「ああん？ じゃなくて、誰？」

むっとした表情で、仰々崎が僕を軽く睨む。

「あごめんなさい。えっと無月です。彼氏です、君の」  
完全にへりくだる僕。

仰々崎はハツと鼻で笑い、僕を一瞥、すぐさまきよるきよる辺りを見回した。そして、すっと立ち上がり、無言で、そして歩調早めで歩き去って行った。

公園から出て行く仰々崎の後ろ姿を見ながら、余莉が腕を組み、うんうん感慨深げに頷く。

「まーむずる、失恋は辛いかもしれないけど、これ乗り越えてまた新しい恋を」

「えっあれ、僕これ失恋したの、え嘘」

\* \* \*

深夜も深夜ド深夜に、女の子の一人暮らしの家にお邪魔するって、なんて大学生的で、なんて恋愛漫画的で、なんて桃源郷的なんだろう、こんなにどきどきするシチュエーションが他にあるだろうか。と、頭の中では思ってるんだけど、部屋があんまりにも汚すぎたんだか別の意味でどきどきしてしまう僕（見たことないようなでかいゴキブリ出てくんじゃないかなー等）。部屋には所狭しと何冊も

の聖書やら何本もの十字架やら何枚ものキリストの肖像画が散らばっている。うーん、これじゃ自分の意思と無関係に勝手に踏み絵しちゃいそう。キリシタン大名が来たがらない部屋第一位の称号を勝手に頭の中で授与しながら、靴を脱ぐ。

「まー狭い家だけどくつろいでつてーあ、飲みもんなんか飲む？」

「あ、じゃあ、もらう」

「水道の水しかないんだけど」

「あ、そうなんだ。うん、でもまあ、もらう」

「なら蛇口に口つけて勝手に飲んでー」

「……あ、じゃあ、やっぱいらないや」

余莉の部屋。

畳六畳、押入れ一つ、流しが一つ、そして玄関からちらっと見える風呂場はおそらくユニットバス。いわゆるとつても大学生らしい1Kの安アパートといったところ。テレビもなければ冷蔵庫も電子レンジも洗濯機もなく、家具らしいものと言えば部屋の真ん中にある小さなちゃぶ台一つのみ、あとは辺り一面に散乱した先述のエクソシスト関連グッズ、以上。生活感があるんだかないんだか。とりあえず僕は、諸々を踏まないようにしながら、慎重に慎重におそるおそる部屋に上がる。

で、とりあえあず、どのへんに座ればいいかわからないので、とうか座れるスペースがないので、部屋の隅っこ、壁に背をくっつけてずるずるゆっくり下がり、小さく小さく体育座りする。

余莉は、ふんふんふんふんと適当な鼻歌（よくよく聞けば映画エクスシストでおなじみのあのメロディ）を歌いながら、パーカーを脱いで、ばっさあーっとロックスターだかなんだかみたいに投げ捨てた。で、そのパーカーは僕の顔にばっさあーと勢いよく覆い被さるうーん汗くさい。とりあえず丁寧に畳んで傍らに置いておく（A型なんで僕）。

「で、あんた何しに来たんだっけ」ばかんとした顔の余莉。

「え、だから、色んなことが起こりすぎてよく理解できないから説

明を聞きに」

「あ！ そうだあたしレポート書かせたいんだった。はいこれ」

余莉はメガネをずり上げながら、近場に落ちていたキリストの肖像画（十字架に磔にされてる一番ベタなやつ）を拾い裏っ返して、ちやぶ台の上に置いた。

「あー別に英語で書かなくていいーからね。英訳はあたしやるし」

「えごめん、どういう流れこれ」

「いやだから国エクから一級認定もらいたいんだっつってんじやん。そのためにはレポート書かなきゃいけないんだっつってんじやん。じゃー書くじゃん。理解？」

「え僕が書」「あんたが体験したんだからあんたしか書けないでしょうよ。それがジャーナリズムでしょうよ」

正しいような正しくないようなことを言いながら余莉が、足元から手のひらサイズの十字架を拾い、とんつとちやぶ台に置く。

「最低八千文字以上でよろしくー」

てことは四百字詰め原稿用紙で二十枚かーと考えただけでちよつと吐き気を感じながらちやぶ台に近寄り、置かれた十字架の先端部分を握って引っ張ると、予想通りすぽんとキャップがとれて現れるペン先。わーサービスエリアとかのおみやげチックなボールペン。

と、余莉がちやぶ台上の空きスペースにごろんと横になり（結構邪魔）、僕をじーっと見ながら、

「つかあんたもたいがいニブいよねー、ぎょーちゃんがホゼッション悪魔憑きだつて気づかなかつたわけ？ 変だつたでしょだつて」

「（ホゼッションの意味は文脈でなんとなく判断した）いや変わった子だなとは思ったけど、別に悪魔とは」

「えーだつて釘とか吐いてなかった？ 口から」

「いや余莉、人間が口から釘なんて吐くわけ」 フラッシュユバツク。「吐いてた！」

思い出す。完全に思い出す。ローソンの前と、公園の、計二回吐いてた。ズボンのポケットを漁る。二寸釘が二本出てくる。間違い

なく仰々崎が口からにゅつと取り出し僕に手渡した釘。と、余莉が手を伸ばし、その二本をひょいっと奪う。

「おー結構でかいねーってかこんなもん吐いてんのにそれでもあんたぎょーちゃんのことちよつと変わった子くらいにしか思ってたの？」

「なんか、鉄分摂取してるのかなあーとか、うん」

アメリカンホームコメディばりのオーバーアクションでやれやれと肩をすくめる余莉。

「じゃーまあいい機会だし教えてあげるけど、ボテツション悪魔憑きの兆候つーのが世の中にはあつてだ、たとえば釘とか石とか留め金とかを口から出したり、いつぞやのOLみたいに動物っぽい声や動きをしたり、さっきのぎょーちゃんみたいに憑かれてる間の記憶がぼっかりなくなつてたり、他にも猥褻なこととか冒瀆なこととかを言ったり、猥褻な露出をしたり、猥褻な」

「あのちよつと猥褻関係多くない？」

「多いわよそりゃ悪魔だもん」

と、急にぶつぶつぶつとポケットの中、携帯が震えだした。慌て取り出すと液晶には妹・ミザリの名前。ごめんちよつと、とか言いながら僕は立ち上がり、スリッパ的な感じで靴を履きながらそそくさと部屋から出る。静かな夜。通話。

「もしもし」

「兄ちゃん？ セックスは？」

「……………あーえつと、ごめんミザリ、文脈くれるかな」

受話器の向こうから深い深いため息が聞こえた。

「兄ちゃん今日デートだったでしょ？ おめでとう。今日金曜だし明日大学休みでしょ？ おめでとう。こんな遅い時間にまだ帰ってこないってことは今ラブホでしょ？ おめでとう。で、セックスは？」

「うーんと、三つ目の前提から間違ってるんだけど、とりあえず今、僕余莉んちについて、もうすぐ帰」

「えっ余莉さんの家？ 3P？」

「いやそうじゃなく」

「コンドーム足りてる？ あたし持ってこうか？」

「なんだか説明するのが無茶苦茶めんどくさくなってきた。ので、とりあえず電話を切った。電源も切った。悪魔ってやたら猥褻だつてさつき余莉が言つてたけど、ならミザリ悪魔憑いてんじゃないかと軽く本気で心配し始める僕。携帯をポケットに入れながら、ゆっくり玄関のドアを開けて再び余莉の家へ入る。

目に飛び込んできたのは、ちゃぶ台の上で寝っ転がる余莉、の裸体。

「らたっ」

「ずばつと勢いよく首をそらす僕（完全に筋痛めた）。

「ほんのちよつとしか見てないけどそれでも脳裏にありありと焼きつく肌色、と、あとピンクかったり黒かったりもなんとなく見えたような気がするけどぶんぶんぶん」と強めに頭を振って消去。

「あー鍵かけといてねーチェーンも」ふわあ、とあくび混じりでのんきに言う余莉。

「な、あの、なんでは、だか？」変な文節で訊きながら鍵とチェーンを言われたとおりにかける（A型なんで僕）。

「えーだつてあたし寝るときマツパじゃないと寝れない体だもん」

「だからって僕が来るときにマツパにならなくても」

「マツパ六十四なんつってね」

「話聞いて余莉」

「あそーだこれ一応言つとかなきゃだけど、あんた、残り六匹悪魔被い終わるまでちゃーんと童貞キープしてね。なにせあんたが穢れちゃったら計画丸つぶれだしさー」

「いやそんなの僕の勝手」むに、と。

目をそらしとか体ごとそらし、立ったままドアのほうを見ながら喋っていた僕の背中に、むに、というそれはそれは柔らかで弾力のある感触が「え」「童貞じゃなくなったら悪魔被えなくなるん

だから絶対絶対キープしろつつつてんの理解？」と、すぐ背後、完全なる密接距離から耳元に囁かれる。ぞくぞくぞくつと首筋に鳥肌が立つ。そして更に、むにむに、と柔らかい感触がもう一度背中にそれはもう作爲的に押し付けるような感じで「え余莉あの童貞キープしろって言いながらやってることと言ってることに矛盾が」「おい、やるのやんないの？ あたしを一級エクソシストにしたいのし  
たくないの？ おい」むにつ。「わかったごめんなさい言われたとおりするから、だからとりあえず服着よう余莉」「着てるけどー？」「え？」ぐいっと腕を掴まれて、強制的に振り向かされる。

目の前には、いつもの白いTシャツ&いつものダメージジーンズ姿の余莉。

にやにやにやとそれはそれは楽しそうに笑いながら、一本指をぴんと立て、

「まこんな感じで、悪魔憑ホレセッションきはときに猥褻な露出をしたりしてあんなのことを誘惑するかも知れないけど、今みたいにしつかり耐えなきゃダメだぞーっていう実習」

「……あそう」なんだか俄然自信なくなってきた。

「あ、ちなみにさつきあんたの背中<sub>に</sub>当てたのは、このスポンジ製手乗り聖母マリア像」

「それ需要どこにあるの」

\* \* \*

本当にありふれた言葉だけだ。

男ってというのは実に単純な生き物だ。

男⇨単純であり僕⇨男である。つまり、僕⇨単純、となるわけで、単純な僕は、単純な気持ちで、余莉の依頼を引き受けた。

つまり、「悪魔憑きの六人の女の子たちと、恋して、キスしろ」という依頼。

引き受けた理由は、とつても単純。

キスしたいからだ。

「うん。まーいいんだけどね、理由はなんであれ、やってくれりゃ  
ーあたしはそれで」

昼。学食の隅っこの席。

余莉は食後の豆乳（前も言ったけど本当にうちの売店これしか飲み物売ってなくてなんだかとてもない悪意を感じる）にストローを刺しながら、へんつと鼻で笑った。

「でもねーむずる、ぎょーちゃんときはあたしが色々セツティングしてやったから上手くいっただけだし、次の奴からは、惚れさせるのも告らせるのも全部あんたが自分でなんとかしなきゃだかんねー、でーじよぶ？」

「ん、え、セツティングしたってなに初耳だけど」

ふっふっふー、と芝居くさくさはつきり声に出して笑い、余莉はストローに口をつけて豆乳を一口、「うえまず」ぺつと床に向かって勢いよく唾を吐く。えー汚っ。「あの、余莉、いくらなんでもそういうところに唾吐くのはないんじゃない」「だってまじーんだもんよ」「うーん、なんか余莉、そういうところ、ガサツっていうかそういう感じだから彼氏できないんじゃないのいつまでたっても」「はあ？

なにお前ちよつと彼女できたからって急に天狗？ Q T N G ?  
バカじゃねーのもう別れたくせにさ」ぐさっ、と心に出刃包丁的なものが刺さるイメージがはつきり頭の中に映った。ああそうか。別れたんだ僕、仰々崎と。別れたというか、むしろ仰々崎的には悪魔が憑いてたせいでもなんにも覚えてないというか。あれ？ なんだろ。心が辛い。彼女できたのなんて生まれて初めてだったから、当然だけど別れるのも初めてで、その初めての別れがこういうイレギユラーな形で、あれ？ なんだろ。納得がいかない。そして心がかなり辛い。

僕が思い出しに打ち負かされてテーブルにおでこをくっつける形でダウンしていると、余莉が我関せずといった感じで勝手にべらべら喋りだす。

「セッティングっていうのはさ、あんときほら、あんた轢かれたでしょー？ で、それを見てたぎょーちゃんに告られたでしょー？ うん、あれね、あそこにぎょーちゃん呼んだのあたしなんだ。で、あんた轢いたトラック、あれ運転してたのあたしのばあちゃんなんだ。へっへへ、つまりあんたらを引き合わせたのは全部あたしってわけであんたの恋愛オールインマイハンド。理解？」

「……理解」

僕の記憶が確かならばイタコをやっているという余莉のおばあさんへ。轢き逃げは犯罪です。まあでも実際あれがきっかけで付き合うことができたわけだからいいんだけど（法的にはよくないけど）。

余莉が頼杖をつきながら、僕をまじまじ見つめる。

「っわけで、まあそうねー、年内に六人全員ティロ・ファイナールぐらいのスケジュールで、うん、あたし年変わったらすぐロシア行きたいし、よし、だからまあさっそく次の女落とせ」

失恋の痛手が覚めないうちに別の女の子と付き合うなんてそんなリアル充実的生活したことない、ゆえに落とせて言われても勝手がわからない、というか次の女の子っていうのが誰なのかまずわからない、ので率直に、

「次って誰」

「お、なんだよ俄然ノリノリじゃんかーお前はあれか、歩く男性ホルモンか」

「……うん、いいから早く教えるなら教えて」

「はいはいあそーだ写真見る？」

「あ、あるんだ写真。うん、じゃあ見る」

「指名料もらうけど」

「あ、じゃあ見ない」

「じゃあフリーでいい？ オプションはどうします？ コースは九十分・百二十分・百八十分ありますけど」

「うん、お昼の学食でなにやらピンク色なお店ごっこはやめよう余莉」

自分でやって自分でツボったらしく、おなかを押さえた前傾姿勢で、テーブルにぐんぐんおでこをぶつけながらくつくくと笑い声を漏らす余莉。正直な話、こいつもなんか悪魔に憑かれてんじゃないかと思えてしょうがない。

と、おでこをテーブルにくっつけたまま、余莉がにゅっと僕に向かって手を差し出した。その手には十円玉が一枚。

「これ、やる」顔を伏せたまま余莉。

「え、うん」わけもわからず、とりあえず受け取る。

がば、と顔を上げ、余莉が僕を見る。おでこ真っ赤。

「次、落とし頃なのは『傲慢を司る悪魔・ルシファー』に憑かれた、女子高生ちゃん」

「女子こ」普段より一オクターブ高い声出た。

「いい？ その十円、そのローソンで募金してきて。それが、女子高生ちゃんとのきっかけになると思うから」

そう言って、余莉はメガネをずり上げながらにんまり微笑んだ。

(後書き)

なんだかとにかく神のみぞ知るセカイを知らない世界にいた自分が  
恥ずかしいです。無知は重罪。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1916y/>

---

無月むずるのあくまでも素晴らしき恋愛遍歴

2011年11月3日21時13分発行